

=== T A C S 情報 第7号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和7年7月8日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5月の平均気温は、17.7℃（対平年差+0.2℃）と平年並であった。

6月の平均気温は、23.4℃（同+2.0℃）と平年に比べかなり高かった。

7月1半旬の平均気温は、28.7℃（同+4.9℃）と平年に比べかなり高かった。

(2) 降水量

5月の降水量は、122.0mm（対平年比99%）と平年並であった。

6月の降水量は、129.0mm（同75%）と平年並であった。

7月1半旬の降水量は、0.0mm（同0%）と平年に比べかなり少なかった。

(3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、18.4MJ/m²/日（対平年比100%）と平年並であった。

6月の平均全天日射量は、18.2MJ/m²/日（同105%）と平年並であった。

7月1半旬の平均全天日射量は、17.3MJ/m²/日（同113%）と平年に比べ多かった。

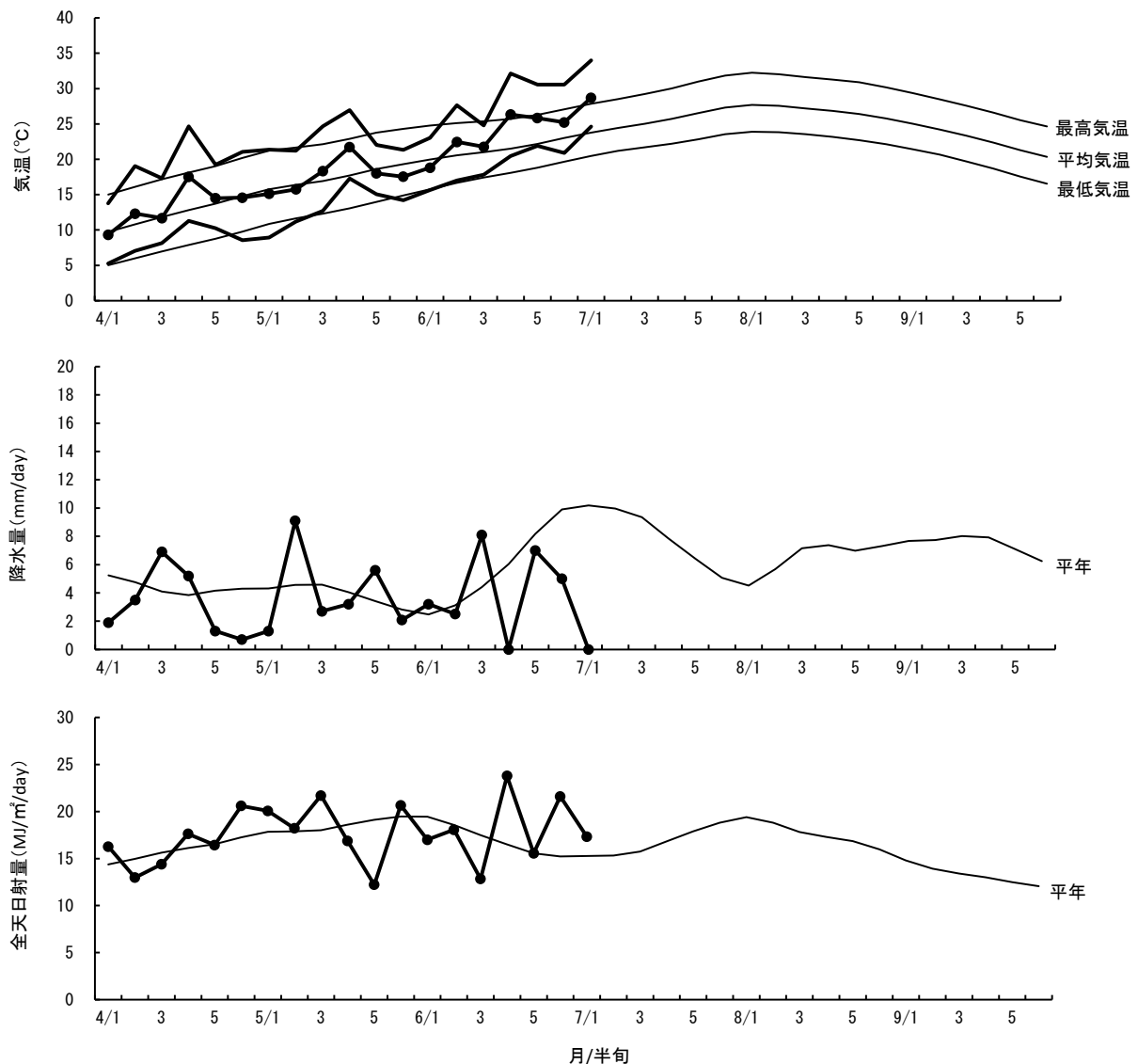


図1 令和7年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（１）コシヒカリ

平年に比べ、草丈はやや長く、茎数は並、葉色（SPAD）はやや淡く、葉齢は0.4葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色（SPAD）はやや淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ2日早い7月9日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ2日早い7月30日頃と見込まれる。

表1 「コシヒカリ」の生育状況（7月8日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R7	5月13日	72.2	23.4	503	12.2	4.0	33.3	(7月9日)	(7月30日)
R6	5月14日	68.7	24.0	510	12.1	3.9	33.8	7月10日	8月1日
平年	5月14日	67.6	24.0	523	11.8	4.0	35.4	7月11日	8月1日
前年比・差	-1	105	97	99	0.1	0.1	-0.5	(-1)	(-2)
平年比・差	-1	107	97	96	0.4	0.0	-2.1	(-2)	(-2)

注1) 平年：H27～R6の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

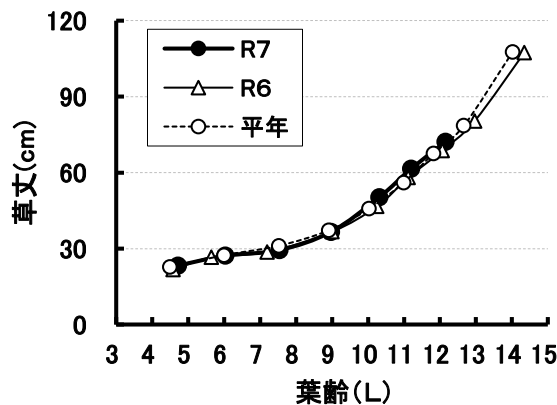


図2 草丈の推移（生観コシヒカリ）

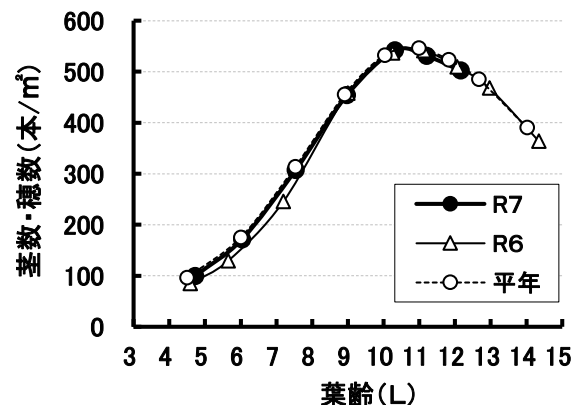


図3 茎数の推移（生観コシヒカリ）

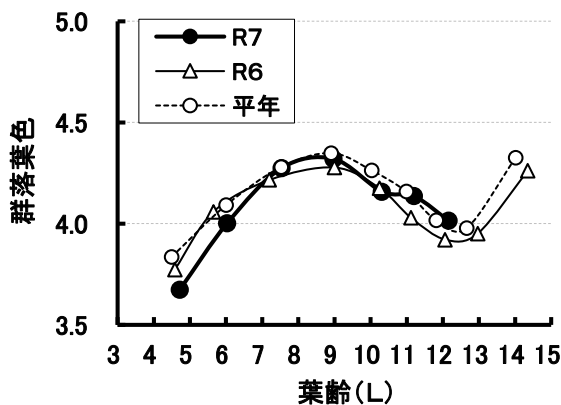


図4 葉色の推移（生観コシヒカリ）

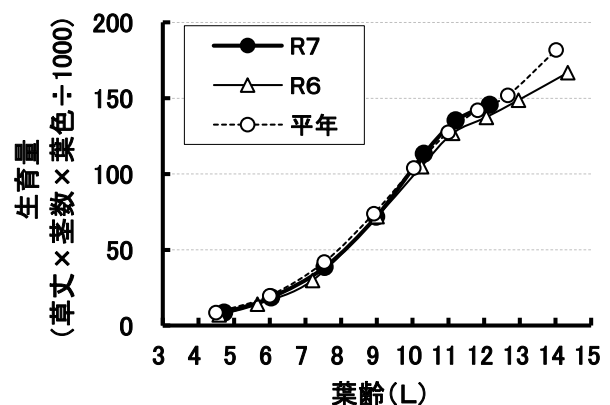


図5 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(2) てんこもり

平年に比べ、草丈、茎数、葉色及び葉齢は並となっている。

幼穂形成期は、平年並の7月12日と見込まれる。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年並の8月3日頃と見込まれる。

表2 「てんこもり」の生育状況（7月8日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD		
R7	5月12日	60.0	33.8	660	12.9	4.2	37.1	(7月12日)	(8月3日)
R6	5月8日	64.0	33.4	634	13.5	4.1	36.7	7月10日	8月1日
平年	5月8日	60.0	33.8	642	13.0	4.1	36.6	7月12日	8月3日
前年比・差	4	94	101	104	-0.6	0.1	0.4	(+2)	(+2)
平年比・差	4	100	100	103	-0.1	0.1	0.5	(0)	(0)

注1) 平年 : H27~R6の平均

注2) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

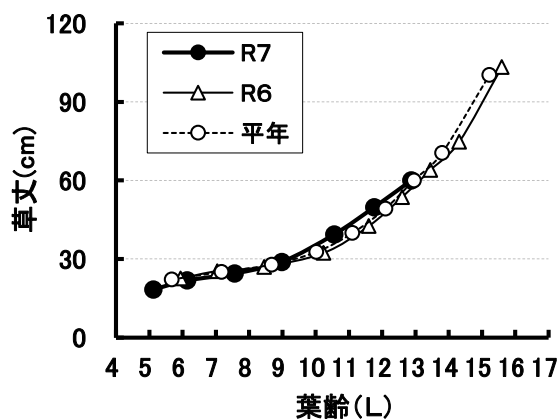


図6 草丈の推移（生観てんこもり）

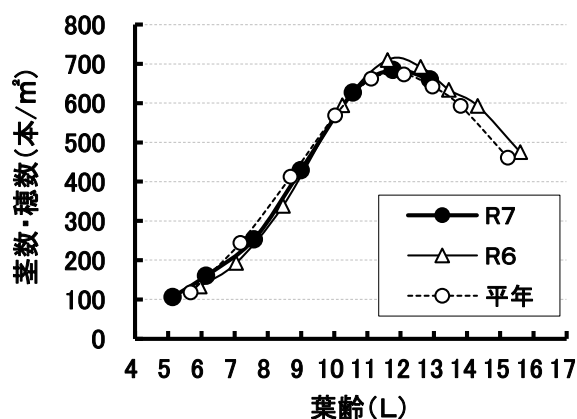


図7 茎数の推移（生観てんこもり）

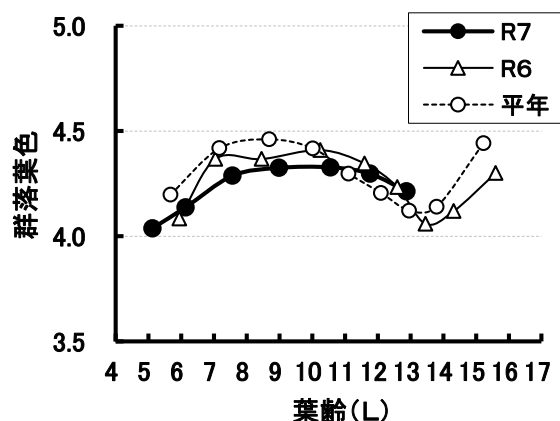


図8 葉色の推移（生観てんこもり）

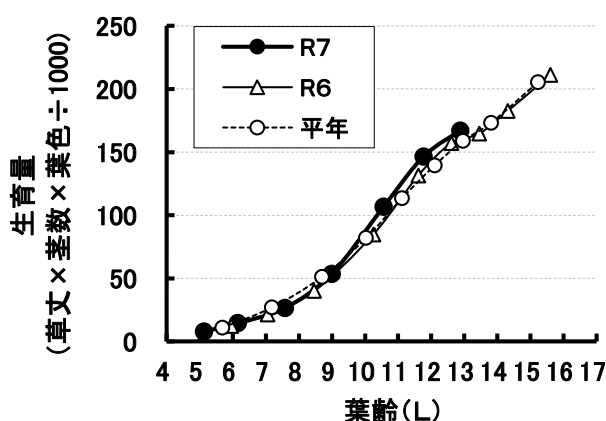


図9 生育量の推移（生観てんこもり）

3 当面の技術対策

- ・ 今後も高温・少雨が予報されていることから、幼穂形成期から出穂期までは、稲体の活力を維持するため、飽水管理を確実に行う。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水管理を徹底する。
- ・ 斑点米カメムシ類が多発しているため、早生品種の防除は、穂揃期（出穂後 3 ～ 5 日）と傾穂期（穂揃期防除の 7 日後）に確実に実施する。

（１）共通管理

- ・ 今後も高温・少雨が予報されていることから、葉色の低下を防ぐため、幼穂形成期から出穂期までは飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を確実に行う。
- ・ 出穂後 20 日間は湛水状態を保ち、登熟期間の稲体活力を維持する。

（２）「コシヒカリ」の管理

- ・ 現在、葉色（SPAD）が急激に低下し、土壤硬度が高いほ場も多いことから、葉色の低下を防ぐため、幼穂形成期からの飽水管理を徹底する。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、出穂 7 日前頃の葉色が淡い場合は表 3 を目安に追加穂肥を確実に施用し、穂揃期の葉色を 4.2～4.5（砂壤土は 4.5）に誘導する。
- ・ 分施栽培では、穂肥は幼穂形成期の生育量（表 4）に応じて表 5 を目安に施用する。

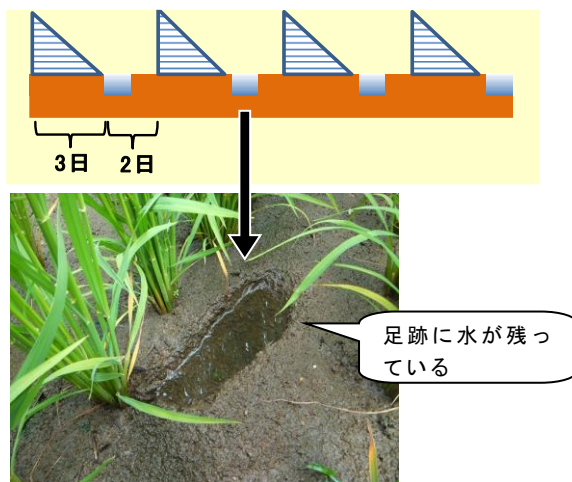


図 10 飽水管理のイメージ

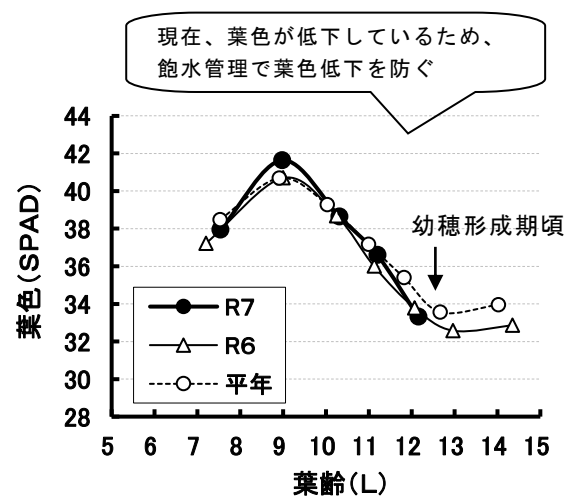


図 11 葉色の推移（生観コシヒカリ）

表 3 「コシヒカリ」の追加穂肥の目安（肥効調節型基肥栽培）

出穂 7 日前頃の葉色	追加穂肥対応
4.0 以下（SPAD 値 32 以下）	出穂 3 ～ 7 日前に
※砂壤土は 4.2 以下（SPAD 値 34 以下）	窒素成分で 0.7 ～ 1.0 kg/10a
4.0 より濃い（SPAD 値 32 より高い）	無し
※砂壤土は 4.2 より濃い（SPAD 値 34 より高い）	

表 4 「コシヒカリ」の目標生育量（分施栽培）

	幼穂形成期	幼穂形成期から 7 ～ 9 日後 （幼穂長 15mm の時期）
草丈	72cm	82cm
茎数	470 本/㎡	430 本/㎡
葉色	3.8	3.6

表 5 「コシヒカリ」の穂肥施用量の目安（分施栽培）

幼穂形成期の生育量	1 回目穂肥		2 回目穂肥	
	時期	N 施肥量 (kg/10a)	時期	N 施肥量 (kg/10a)
適正	幼穂形成期 7 ～ 9 日後	1.5	1 回目の 7 日後	1.5 ～ 2.0
やや過剰	幼穂形成期 9 ～ 11 日後	1.0 ～ 1.5	1 回目の 7 日後	1.5 ～ 2.0
過剰	施用しない		出穂の 7 日前	1.5 ～ 2.0

※過剰：葉色が 4.0 以上で茎数が 550 本/㎡以上

(3) 「てんたかく」の管理

- ・ 出穂期は、平年並の気温で推移した場合 7 月 14 日頃と見込まれるが、幼穂形成期以降が高温で推移しているため、1～2 日程度早まると考えられる。
- ・ 現在、生育量はおおむね適正となっているが、葉色が 4.0 未満（砂壤土は 4.2 未満）と淡い場合は、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行い、穂揃期の葉色を 4.2～4.5（砂壤土は 4.5）に誘導する。

(4) 「てんこもり」の管理

- ・ 今後平年並の気温で推移した場合、幼穂形成期は平年並の 7 月 12 日頃と見込まれる。
- ・ 幼穂形成期頃に葉色が 4.0（砂壤土では 4.2）を下回らないよう、葉色が淡いほ場では直ちに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行う。

(5) 病虫害防除の徹底

①斑点米カメムシ類

7 月 2 日カメムシ速報（第 1 号）発出、注意報（第 2 号）発令

- ・ 6 月下旬の畦畔等の雑草地における斑点米カメムシ類の確認地点率が平年に比べ高く、発生数がかかなり多くなっているため、イネ科雑草が出穂しないように畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。
- ・ 早生品種の防除は、粉剤又は液剤体系とし、穂揃期（出穂 3～5 日後頃）とその 7 日後の傾穂期の 2 回防除を徹底する。なお、今後は高温により出穂期が早くなる場合があるため、防除適期を逃さないように注意する。
- ・ 近隣に雑草地や麦あとと不作付地等があると、斑点米カメムシ類が侵入するおそれがあるので防除を徹底する。
- ・ 例年、発生密度が高い地域や防除後も水田内で斑点米カメムシ類の発生が認められる場合は追加防除を行う。

②紋枯病（紋枯病の初発確認日：前年 7/5、平年 6/26）

- ・ 前年多発したほ場などでは、出穂 3～4 週間前の粒剤散布や穂ばらみ期の防除を行う。
- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・ 箱施薬剤と本田防除の体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表 6 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 (発病株率)	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)
コシヒカリ・富富富	15%	出穂 10 日前頃
てんこもり	15%※	出穂 7 日前頃

※てんこもりの発病株率は追加防除の目安（暫定）

③いもち病（葉いもちの初発確認日：本年 7/2、平年 7/10）

- ・ 7 月 2 日に初発が確認されたことから、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生を確認した場合、直ちに防除する。

BLASTAM情報（葉いもち予測システム）はこちらから
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



④白葉枯病

- ・常発地等では、出穂３～４週間前にオリゼメート１キロ粒剤等を散布する。
- ・ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

⑤稲こうじ病

- ・常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

⑥着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・稲体活力の低下により発生が助長されるため、適正な施肥や水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈はやや長く、茎数、葉色は並、葉齢は0.2葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、茎数及び葉色は並となっている。

幼穂形成期は、近年並の7月13日と見込まれる。

今後、近年並の気温で推移した場合、出穂期は近年並の8月4日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月8日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R7	5月17日	63.7	25.7	561	11.7	4.3	39.0	(7月13日)	(8月4日)
R6	5月17日	62.7	27.7	605	11.7	4.2	39.1	7月13日	8月4日
近年	5月15日	59.4	26.3	568	11.5	4.2	38.8	7月13日	8月4日
前年比・差	0	102	93	93	0.0	0.1	-0.1	(0)	(0)
近年比・差	2	107	98	99	0.2	0.1	0.2	(0)	(0)

注1) R7：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・プラ削減 対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R6平均

注3) 本年の幼穂形成期及び出穂期は予測値

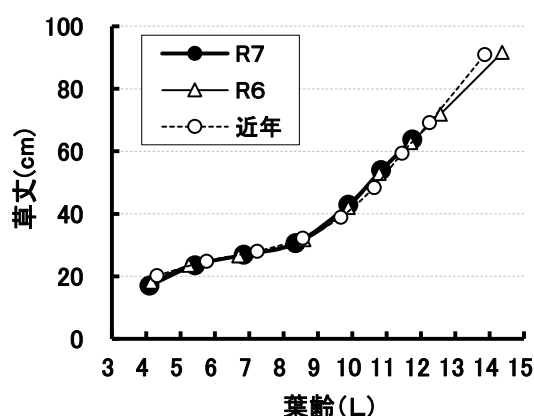


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

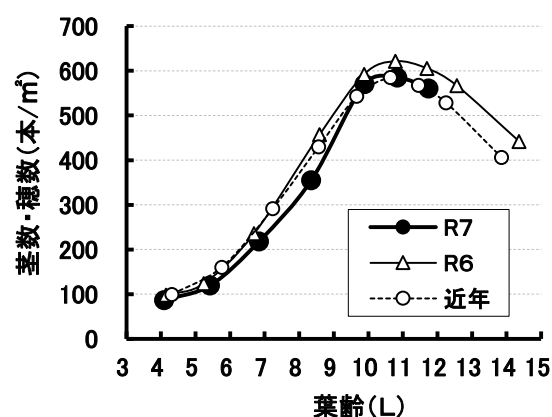


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

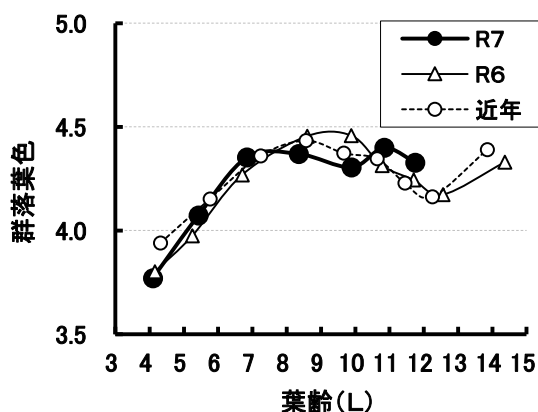


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

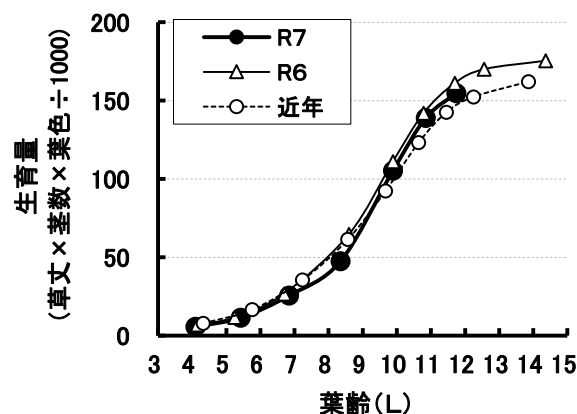


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

2 当面の技術対策

- ・ 今後も高温・少雨が予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、田面を乾かしすぎないように間断かん水を行う。
- ・ 幼穂形成期から出穂期までは、稲体活力を維持するため、飽水管理を徹底する。

(1) 水管理

- ・ 今後も高温・少雨が予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、「富富富」慣行よりも落水期間の短い間断かん水（「コシヒカリ」と同様の水管理）を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する（表 2）。
- ・ ただし、葉色が濃い場合（群落葉色 4.5 以上、SPAD40 以上）は「富富富」慣行の水管理（落水期間が長めの間断かん水）を行う。
- ・ 幼穂形成期から出穂期までは、稲体の活力を維持するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。ただし、葉色が濃い場合は間断かん水を行う。

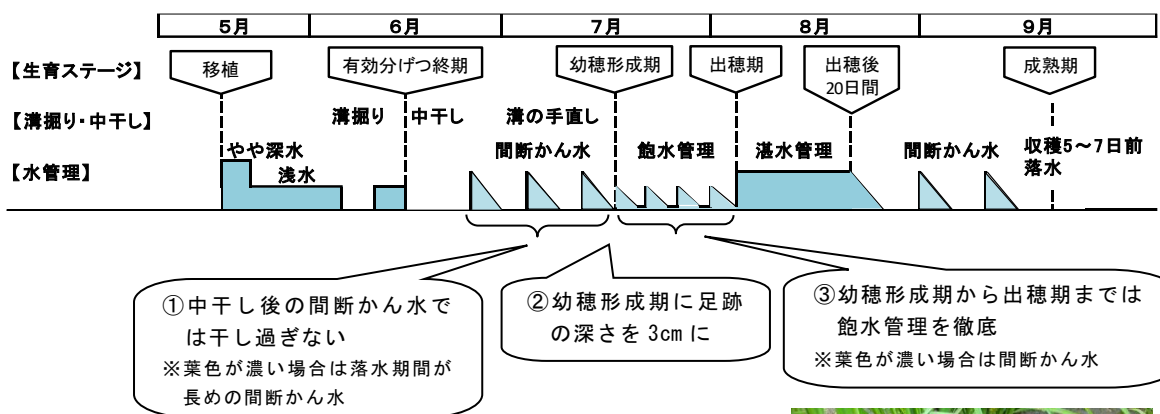
表 2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD：草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色：草丈×茎数×群落葉色÷1,000

<水管理のイメージ>



(2) 肥培管理

- ・肥効調節型基肥栽培では、原則、追加穂肥は施用しない。

ただし、幼穂形成期の14日後のSPAD値が32（群落葉色4.2）程度と淡い場合は、出穂3日前までに窒素成分で1.0kg/10a程度の追加穂肥を行う。

- ・分施栽培では、穂肥は生育量（表2）に応じて、表3を目安に1回目を幼穂形成期の7日後頃、2回目を1回目の7日後に施用する。

表3 穂肥施用量の目安

幼穂形成期の生育量	N施肥量 (kg/10a)	
	1回目	2回目
適正	0.75～1.0	1.5
過剰	0	1.5

表4 出穂期の生育の目安

草丈 (cm)	穂数 (本/m ²)	SPAD	群落葉色
90	400	35	4.4

幼穂形成期以降の適切な水管理と施肥により目標の葉色に誘導する

(3) 病虫害防除

- ・病虫害防除は「コシヒカリ」に準じて実施する。特に、「富富富」の「いもち病抵抗性」を持続させるため、穂いもち防除（穂揃期）を確実に実施する。
- ・ただし、生育期間を通した化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるように留意する。